

学生主体の大学広報活動

——国際関係学科10年の取り組みの検討——

亀井伸孝・飯間有紀子・石井 俊・多田隼人・
河島健太・坪井佑介・橋本果織・赤塚まひろ・
清水優花・松野佑子・木下涼美・白井(宮原)杏奈

はじめに：本論の目的と執筆陣

本論は、愛知県立大学外国語学部国際関係学科が実践してきたユニークな学生主体の広報活動の成立・展開の経緯と現状について記録し、同時代における大学広報のあり方について検討することを目的とする。本論の元となるのは、2022年11月19日（土）に開催された公開シンポジウム「学生主体の大学広報活動：国際関係学科10年の取り組みの検討」である。シンポジウムの発表原稿に基づいて必要な加筆を行い、論文の形式とした。このような経緯から、本論の情報はすべて2022年11月時点のものである。

本論は、計12人の共著で執筆された。亀井は本学科教員であり、他は本学科卒業生または在学生である。亀井は全体を企画し、総論を執筆した。第二著者の飯間は、全体編集と校正における主要な役割を担った。それ以外の執筆者は、各パートの執筆を担当した(各章や節の見出しに記名あり)。最後に全体を綴り合わせた草稿を作成し、全員で確認を行った。

第1章 国際関係学科における学生広報の成立と展開（亀井伸孝）

1-1. 国際関係学科公式学生ブログ発足の背景

国際関係学科は、2009年に本学外国語学部に新設された。新設学科として広報が求められた背景として、ふたつの要因があった。ひとつ目の背景は、新学科を対外的にアピールする必要性があったことである。受験生に対して学科の特徴と魅力を発信し、新設学科であることに伴う知名度の低さを補う必要があった。ふたつ目には、「国際」が何を意味するかの内実を理解し、示す必要があったことである。入学した学科生たちの間にお

いても、「国際」って広すぎる」「何をしているか聞かれても、返答に困る」など、学生たちにおけるアイデンティティにも関わる問題であった。

教員側の事情としては、積極的な発信はしたいが、日々の業務で忙しく、広報活動にあまり時間をかけられない状況があった。また、学生視点での発信の重要さも念頭にあり、学生たちが書き手になって学科のことを発信してもらえたらありがたいという思いがあった。

一方、学生側の状況もこれに重なった。2012年春の新入生歓迎合宿の後、その実施を担当した学生たちとの懇親会の席上で、当時の2年生たちの一部が、すでに私的なブログを作っていることが判明した。せっかく運営しているのであれば、受験生たちにも発信し、学科の知名度を上げようというアイデアが膨らんだ。

1-2. 2012年に発足した公式学生ブログ

以上のような経緯で、学生たちが自主的に運営するブログを、学科が公式の広報活動と認定することで、学生が中心に書き発信していくメディアを作ろうというアイデアがまとまった。新歓合宿の実行委員たちを中心とする、当時1-2年生であった数名の学生たちが集まり、構想を練った。

2012年6月頃に「国際関係学科学生広報部」が発足、学科会議でその活動を承認し、相談担当を亀井が引き受ける形となった(2017年度は長期在外研究で亀井が不在であったため、藤倉哲郎教員が担当した)。広報活動は、学科の企画委員の教員の担当事項であるが、年度ごとに変わる企画委員ではなく、学生サークルの顧問のような形で、継続して亀井が相談役を引き受ける形とした。

最初の記事が掲載されたのは、2012年7月18日である(写真1)。初期のブログ編集会議は、構成員が数人という少人

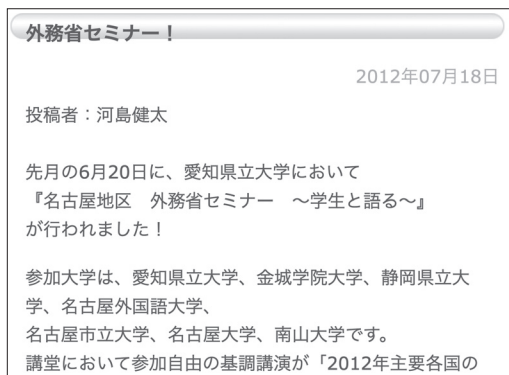


写真1 最初の投稿記事(2012年7月18日掲載)
(河島, 2012)

数であったこともあり、おもに亀井の研究室において行われていた(写真2)。やがて、次の年度の新生入生なども誘い、構成員も10-20人程度と増えていったため、会議室や講義室を使って編集会議を行うようになった。



写真2 初期の編集会議
2013年、亀井研究室にて石井俊撮影
(石井・赤塚, 2022)

1-3. ルールの整備と慣習の定着

記事の掲載が軌道に乗り始めた頃、いくつかのルールを整備することとなった。記事は毎週日曜日

に定期掲載し、水曜日に臨時掲載する、実名による署名入りの記事とする、おおむね月例で昼休みなどに編集会議を開催する、などのルールである。

世代交代の方法としては、2年生の春から委員長などの執行部を担当するとともに、毎年春に1年生メンバーを募集し、執筆や掲載のスキルを継承する、その1年生たちがメンバーとして定着した初夏頃に3年生は引退する、などが慣例となっていった。

受験生や合格者から届いた質問やコメントに回答し、合格祈願代行などを行うこともあった。このようなメンバーの丁寧な対応に魅力を感じたためか、受験期にブログを閲覧していた高校生が本学科に入学し、今度はスタッフとして記事を執筆、掲載する側になった例もあった。

1-4. さまざまなメディアへの展開、活動の派生

ブログを中心とした対外的な発信は、やがて他のメディアを活用する形へと派生していった。学生ウェブサイトを整備(2013年)、TwitterとFacebookのアカウント開設(2016年)、Instagram開始(2020年)である。

また、学科全体の発信活動を行うことに関心のある学生たちであるため、オープンキャンパスのスタッフを兼ねたり、全学の広報メディア『探・鼎大』(当初は紙媒体での発行、やがて2019年からInstagramに移行)のスタッフを兼ねたりする学生も現れた。2022年からは大学公式Twitterの広報活動が開始され、さっそくそのスタッフにも参画し始めた。

メディアとの関連では、2015年、NHK総合テレビの朝の情報番組『あ

さイチ』のスタッフが、学生が発信したバナナ料理の記事に目を止め、学生広報部を通じて取材・出演を依頼してきた。取材結果は同年3月に放送され、本学科の活動が全国に紹介されるという達成となった(写真3)。

NHK 総合テレビ「あさイチ」で国際関係学科の学生の活動が紹介されました

NHK 総合テレビの朝の人気番組「あさイチ」(2015年3月31日(火)8:15~放送)で、愛知県立大学国際関係学科の学生たちによる課外活動が紹介されました。同番組の「スゴ技Q」というコーナーの特集「意外なパワー続々 そんな"バナナ!"」で、本学科の学生たち6人が得意のバナナ料理の数かずを披露するというものです。



写真3 NHK『あさイチ』出演(2015年3月31日放送)(亀井, 2016)

広報に関わる学生の人脈は、さらにさまざまな関連活動を派生させることとなった。学生主催行事のために学生たちが出資して積み立てているプール金「バナナ基金」を運営し、交流会などの行事の開催を呼びかけたり、県大祭に出店を行ったり、名古屋市栄の栄で毎年秋に開催される国際交流行事「ワールド・コラボ・フェスタ」への出店を行ったりした(2013年、2014年)。新歓合宿の実行委員を兼ねることや、学生自主企画研究への応募と採択(2014年、2019年)、文部科学省ミュージアム「情報ひろば」での公開展示やシンポジウムの実施をすることもあった(2019年)。

新型コロナウイルス感染症が流行した時期である2020年頃は、対面授業で学生どうしが会う機会がないなかであって、学生による広報活動は、とくに在学生が新入生に情報を提供し共有するための貴重なプラットフォームとなった。さらには、卒業時の謝恩会の中心スタッフを担ったり、同窓会などを開催したりと、卒業後もつながる人脈を形作っている。

1-5. トラブルへの対処

いくつかの困難に直面したこともある。時には、スタッフ数や後継者の不足に直面した時期があったりした。また、一般からの不適切な書き込みが見つかり、削除するなどの対応をしたこともあった。スキルの継承不足で掲載ミスをし、過去の記事の写真を誤って消失してしまうこともあった。

学生主体の大学広報活動

さらに、感染症流行期にあって、行事開催の報告記事やマスク着用のない記念写真の掲載が適切かどうかなど、倫理面で戸惑うケースもあった。しかし、問題が起こるたびに、教員からの助言もふまえつつ学生たちが自主的に対応し、そして10年の継続を達成した。

1-6. データで見る学生広報

2012年7月に掲載を開始してから、10年4か月の間の投稿記事数は、586件であり、1か月あたり平均4.7件であった。その間の閲覧回数は、171,055回であり、1か月あたり平均1,379.5回であった（いずれも2022年11月18日正午現在）。広報活動に参画した学生数は、12学年で計93人となった。おおむね毎年7-8人の学生が参加し、学科全体の14%程度を占めていることが分かる（表1）。

表1 広報委員の数と割合

入学年度	広報委員数(人)	学科入学者数(人)	学科生全体に占める割合(%)
2011	3	49	6.1
2012	2	45	4.4
2013	11	41	26.8
2014	6	57	10.5
2015	14	60	23.3
2016	11	58	19
2017	7	58	12.1
2018	7	57	12.3
2019	5	61	8.2
2020	7	57	12.3
2021	14	60	23.3
2022	6	57	10.5
12学年計	93	660	14.1
12学年平均	7.8	55	14.1

(公式学生ブログ掲載データ(2022年11月17日閲覧)に基づき亀井作成)

1-7. これからの課題

今後の活動を見据えて、いくつかの課題を記しておく。まず、マルチメ

ディアと時代の要請への対応である。初期メンバーは公式ウェブサイトを設置したが、やがてウェブサイトの更新頻度が下がっていき、現在はTwitterやInstagramなどのSNS (Social Network Serviceの略、以下SNS)の活用が頻繁になっている。新メンバー募集の広報も、紙のチラシからLINEなどでのやりとりに変わっていった。

ふたつ目に、プライバシー重視の時代の広報のあり方である。インターネット上で多くの情報が簡単に流通する利便性がある反面、個人情報に関する敏感な意識も強まっている今日、何をどこまで掲載してよいのかの判断が迫られるケースがある。

さらに、SNSをめぐるさまざまなトラブル、たとえば情報流出や炎上などを予期した対応も、今後はいっそう求められるかもしれない。しかし、さまざまな課題を考え合わせつつも、今後とも学生主体の自由な広報活動が盛んになっていくことを期待したい。

第2章 大学広報を取り巻く現状と課題 (二つのグループによる研究成果報告)

2-1. 学生主体の広報活動 Remake

(石井俊・河島健太 [2014年度学生自主企画研究グループ])

2-1-1. 研究背景および研究目的

2012年、本学国際関係学科有志によって、学生主体・学生目線による、受験生や保護者向けの情報発信のツールとして、ブログの運営を開始した。同ブログが立ち上げ軌道に乗り、自らの活動の意義を明確に確認したいと思うようになった頃(2014年度)、「学生自主企画研究」事業を知り、この取り組みを研究に昇華させるべく応募、採択される。

同研究では、当時「学科単位・学生主体」の広報活動の参考例が乏しく、持続させるための方策を見出したいという目的から、本学のオープンキャンパス来場者(高校生など)へのアンケート調査や、類似学部・学科で広報活動に特徴のある大学への訪問(フィールドワーク調査)等を通し、「学生主体の大学広報活動」という取り組みが有効であることを確認作業と、その本学の実情に即した方策について検討の上、提言を行った。

今回の研究では、2022年に同ブログの発足10周年、すなわち本学国際関係学科における学生主体の広報活動がスタートし10年という節目を迎

えたことで、この10年間の時代の変化に鑑みて、改めて最適な「学生主体の大学広報活動」のあり方を模索するとともに、この10年間の活動の意義を確認することを目的としたものである。

2-1-2. 調査方法

研究担当者2名とも社会人（会社員）でかつ遠隔地に居住していることから、対面で長時間にわたって研究に取り組むことは難しいため、基本的には2014年度に実施した前回の研究内容を再度取り上げ、その上でこの10年の社会変化、特にコミュニケーション方法やインターネットなどの情報通信技術に関して変化が著しい事項の洗い出しを行った。10年前の研究結果にこれらの変化を付加させることで、これからの大学広報活動のあり方において、変化が必要な考え方・活動と、継続すべき事項を明示することとした。

2-1-3. 結果

この10年（2012年から2022年）の外部変化要因として、①情報収集端末の変化、②情報収集手段の変化、③新型コロナウイルス感染症流行による急速な社会変化、が挙げられると考えた。これらの要因について具体例・データを基に、以下に詳しく記述する。

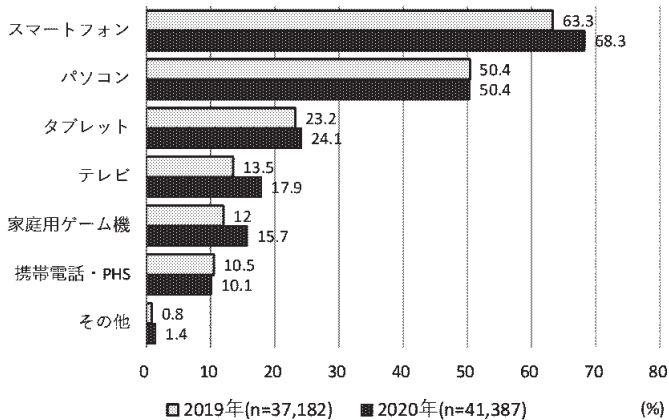


図1 情報通信機器の世帯保有率
出所：総務省（2022a）を基に筆者作成

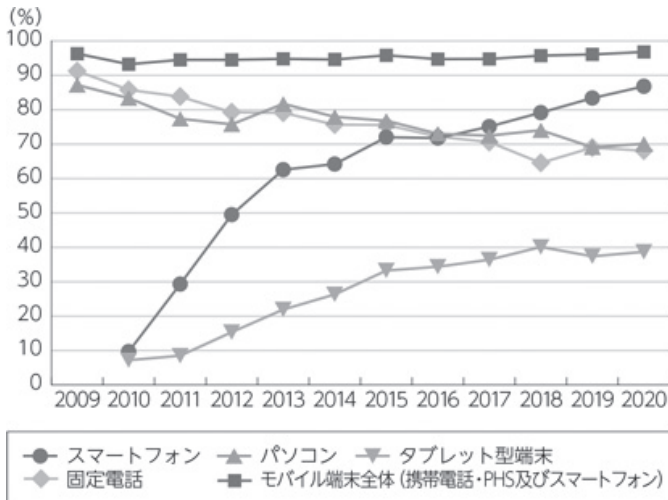


図2 主なインターネット利用機器（個人）

出所：総務省（2022c）を基に筆者作成

①についての具体例としては、スマートフォンならびにそのアプリケーションの発展により写真・動画加工がパソコンでなくても容易かつ高品質に処理できるようになったこと、また、市中における高速通信回線（4G/LTE・5G回線や公衆Wi-Fiスポット）が普及したことが挙げられる。実際に、総務省「通信利用動向調査」によれば、情報通信機器の世帯保有率は、2015年付近まではパソコンが最上位であったところ、それ以降現在に至るまではスマートフォンにその座を明け渡している状況であり、2020年の調査においては、その差は20%近くにまで拡大している。このことから、主で使う情報収集端末はパソコンからスマートフォンに移行しつつあると言え、スマートフォンの可搬性等のメリットも考慮すれば、情報を発信する際には、受け手の「スキマ時間」等であっても伝えることができるよう、より簡潔かつ視覚的な内容にするよう心がけると良いだろう。

②については、SNSの利用率が飛躍的に上昇したことが特筆される。同「通信利用動向調査」を再び参照するが、2015年調査におけるSNS利用率では約50%だったのに対し、コロナ禍を経た2021年調査では約80%となっており、大多数の国民が日常的にSNSを利用するようになったと

学生主体の大学広報活動

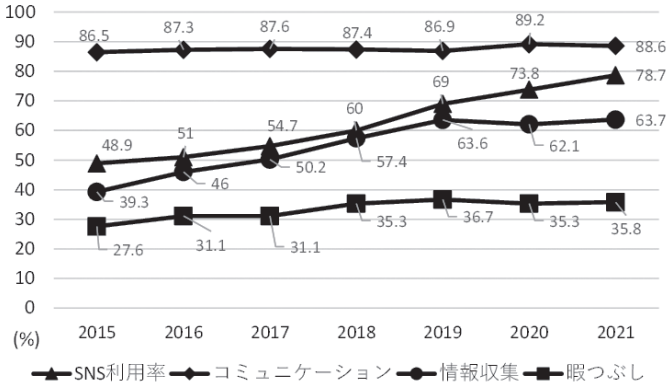


図3 SNS利用率・主な利用目的（複数回答）

出所：総務省（2022a）を基に筆者作成

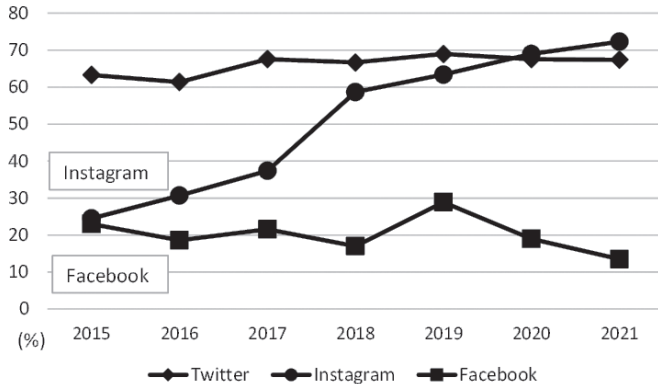


図4 SNS別利用率（10代）

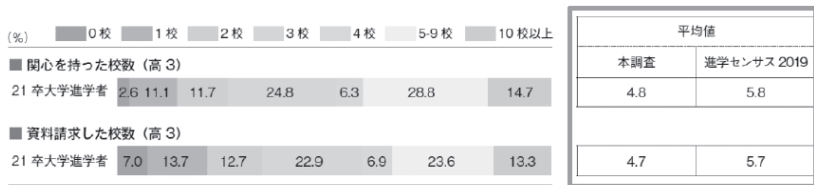
出所：総務省（2022b）を基に筆者作成

言えるだろう。また、それに伴い、SNSの機能も向上し「タグ付け」による検索方法の普及であったり、ユーザーの特性に合わせた情報が表示されるようなアルゴリズムの進化などが功を奏し、SNSを使用した情報の発信者と受信者のマッチングが容易になってきていると考えられる。

一般的にSNSの強みとしては、情報の視覚化・時系列化がされやすいことや、一般大衆目線での情報収集・発信が可能であることなどが挙げら

れる。さらに、上記の SNS の機能向上の件も踏まえれば、SNS の一般ユーザーであっても、時にして大多数のユーザーに対して影響力のある情報発信をする機会（いわゆる「バズ」）も得られる時代になっていると言える。尚更、情報収集・発信の第一の選択肢として、SNS という媒体が選択されるようになったのではないだろうか。

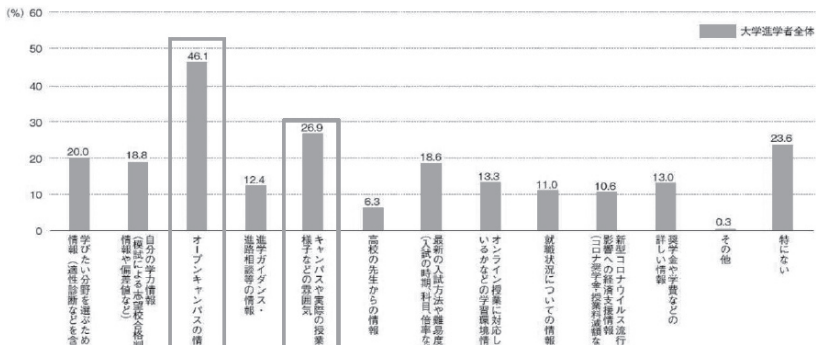
③については、コロナ禍前後における高校生の生活実態調査を参照するに、「遅寝遅起き」傾向になり、また、オンライン授業・休校等で在宅時間も増え、メディア接触率、とりわけスマートフォン等によるインターネット接触率が著しく向上している。この事象から読み取れることとして、コロナ禍前より一日に取得する情報量や、その速達性に優れたインターネットの接触率が高まっていることで、若者世代におけるトレンド形成・衰退



(出典) リクルートカレッジマネジメント <https://souken.shingakunet.com/higher/2021/07/post-9503-1.html>

図5 コロナ前後での関心／資料請求校数の変化

出典：リクルートカレッジマネジメント（2021:13）



(出典) リクルートカレッジマネジメント <https://souken.shingakunet.com/higher/2021/07/post-9503-1.html>

図6 コロナにより進路検討について困っていたこと

出典：リクルートカレッジマネジメント（2021:13）

の勢いやサイクルがより促進されやすい状況になっていることが考えられる。つまり、これに対応する情報発信をするためには、従来より鮮度の高い情報発信を念頭に置くべきだろう。

続いて、コロナ禍前後における実際の受験生層の動向調査を参照すると、コロナ禍前と比べ、志望大学数が減っていたほか、コロナ感染対策による行動制限の発令や、それに伴いインターネットでの情報収集が促進されたこともあり、大学の実際の雰囲気に関する情報が乏しく、決め手に欠ける状況が推測できる。これを大学運営側として捉えるのであれば、「受験生に志望を検討してもらえる機会」が減ることにより、受験生の獲得競争がより苛烈になりやすいことを意味しており、これに対応するためには、データや事実中心の羅列の情報提供ではなく、大学生活の雰囲気や文化・風土といった言語化しにくい事柄の情報提供をいかに行っていくかが肝要となっさそうだ。

2-1-4. 考察と提言

上記①～③で挙げた変化を勘案した結果、次に挙げるような学生主体の大学広報活動における好機（オポチュニティ・兆し）があるのではと考えた。

①オープンキャンパスや学内の雰囲気に関する情報を、短時間でも大量、正確、そして新鮮な情報をもって提供することで、より満足度の高いニーズを汲み取れるのでは？

② SNS のタグやトレンドを活用して、大きく知名度を上げることができるとあるのでは？

①についての対応方法として、本国際関係学科ブログの記事を、短時間でもより効率的に情報収集できるように文章を短く・簡潔にしたり、写真や動画を多用したりすること、また更新頻度も従来より多くする必要があると考える。

また、ブログ記事の内容も、大学（学科）の雰囲気が分かるものを中心にするなど昨今の受験生層のニーズに対応させること、そして、定量・定性分析を常に行い、「ブログを投稿して満足」するに終わらず、常に効果的な広報ができていないか検討をする癖を身につけることが有効だろう。

②については、SNS の運用についての考え方の見直しが必要と考える。2022年現在は、当時は開設していなかった、国際関係学科の Twitter（現

名称X)・Instagramのアカウントが存在しているが、これを中心に広報活動を展開し、より詳しい情報を求めるニーズに対応するために、それらからブログに誘導するといった活用方法が時代に即しているのではないだろうか。

また、SNSを運用するだけでなく、今日・今週・今月のトレンドをしっかり抑えた上で、適時適切な投稿を心がけることで、より効果的に情報発信、ひいては拡散を狙っていけるものと思われる。

ただ、SNS中心に運用することは、昨今多く報道されているように、いわゆる「炎上」と呼ばれる、不適切な投稿を引き金とした他ユーザーからの誹謗中傷、あるいは批判といった事態に適切に対応できるよう予め運用規定を策定の上、行動指針を担当者間で共有するなど入念に備えたい。また、SNSの拡散性を考慮すれば、誤った大学・学科のイメージが流布するといった可能性もあるため、大学を運営する法人側とブランドイメージ等について見解を擦り合わせた上で、同じ基調・指向性の情報発信となるように注意されたい。

最後に、「学生主体の大学広報活動」とは、このブログの開設当時に投稿された設立経緯にも言及されているように、あくまで「自分たちが居る場所をより魅力的なものにしていきたい」という想いがモチベーションとなった、学生の主体性が前提の活動である。今回の研究でこうした活動の理想的な考え方・方向性を提起したとはいえ、その時代毎の社会情勢に適応した現役学生達の意思が何よりも大切である。それを軽視し、伝統・慣習やデータといった要素ばかりに依拠した活動であれば、最早それは別ジャンルの活動であろう。今後もその時代に応じた彼らなりの意思でもってこの活動が継続されていくことを願ってやまない。

2-2. 学生によるマルチメディア広報の評価と実践

(多田隼人・白井(宮原)杏奈・飯間有紀子[2019年度学生自主企画研究グループ])

2-2-1. 研究背景及び研究目的

2019年に愛知県立大学は新大学誕生10周年及び長久手移転20周年を迎え様々な記念事業を実施した。国際関係学科もまた設立されてからの10年間に実施された学生主体の活動が評価され、その一つである「フィールドワーク写真展」(以下、旅の写真展)が「文部科学省における大学、研究企画等との共同企画広報」に採択されたことから、文部科学省での旅の

写真展及び公開シンポジウムを実施した。これを受けて本研究では、国際関係学科の学生がこれまでに実施してきた学生主体の広報活動の総括と再評価を行うことを第一の目的とする。また写真、映像、インターネットを用いたマルチメディア広報について、学生の視点から分析し、大学の知名度向上に資する学生主体の広報活動の更なる発展の可能性を提示することを第二の目的とする。

マルチメディアとは文字・静止画・動画・インターネットなどの「情報伝達手段を複合させたもの」（岡本ほか編，1997:476）である。したがって本研究における「マルチメディア広報」とは、こうした多様な情報伝達手段を用いた広報活動を表すものとする。

本研究の成果は、マルチメディアを用いた学生主体の広報活動の一モデルを提示するとともに、本学の知名度向上に資する広報活動の発展に寄与することが期待される。

2-2-2. 研究方法

本研究では、文献調査に加え、映像制作や写真展実施などの実践活動を通して得られたフィードバックの分析、学生への質問紙調査、本学広報課への聞き取り調査を用いて、現状の広報活動について学生の視点から分析した。

2019年8月7日、8日の2日間に渡って実施されたオープンキャンパスでは、高校生に対して質問紙を配布した。また質問紙と同様の問いを含む Google Forms にリンクする QR コードを会場に掲載した結果、計87名から回答を得ることができた。対象の選考理由は、本学の主な広報対象が大学受験を控える学生であり、かつ国際関係学科に関心があると考えられるためである。

2019年11月14日には、本学科の1年生（当時）に対して同様の質問紙を配布し、計58名から回答を得ることができた。対象の選考理由は、受験生時代の記憶が上級生に比べて残っており、実際に利用したメディアの把握や既存の情報の認知度等を計ることが可能であると考えたためである。

それぞれの質問紙調査の結果については、各広報媒体についての認知度を比較、考察した。なお2022年11月に実施された公開シンポジウムの主旨に合わせて、本研究における質問紙調査の結果の一部及び広報課への聞

き取り調査の結果については内容を省略した⁽¹⁾。

2-2-3. 広報活動に関する質問紙調査の結果

以下では、質問紙調査から得られた結果のうち、「大学や学科について調べる手段」および「本学科の学生が主体的に運営するメディア媒体」の認知度についての回答結果をそれぞれ示す。

図7は大学及び学科について調べる手段についての回答結果をまとめたものである。高校生では「ネット（大学の公式サイト・その他のサイト・SNS）」が最も多く、続けて「パンフ（大学のパンフレット）」及び「人から（先生・家族・友人・知人の情報）」が同数であった。当時の本学科1年生では「ネット（大学の公式サイト・その他のサイト・SNS）」が最大であり、「パンフ」及び「人から」が順に続いた。結果からインターネットを用いた情報収集が主流であるということが分かった。

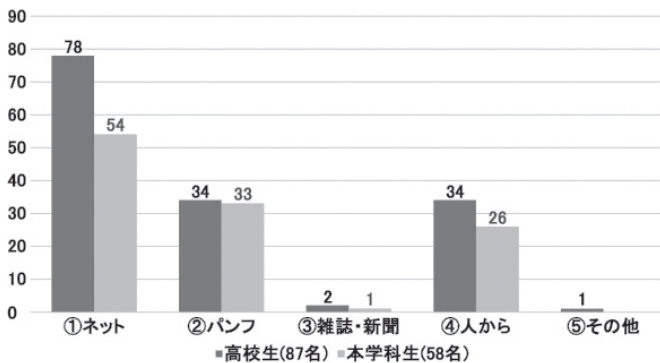


図7 大学・学科のことを調べる手段についての回答結果
質問紙の回答結果より筆者作成

図8は国際関係学科オリジナルサイトの認知度についての回答結果をまとめたものである（「愛知県立大学外国語学部国際関係学科 学生オリジナルサイト」）。高校生のほとんどはオリジナルサイトを知らない一方で、当時の学科1年生では「知っていて見たことがある」という回答が最も多かった。「知っているが見たことがない」という回答も含めると、当時の学科1年生への認知度は高く、高校生の回答結果とは対照的であった。なお、オリジナルサイトは引継ぎが行われていなかったためか、ここ数年は

学生主体の大学広報活動

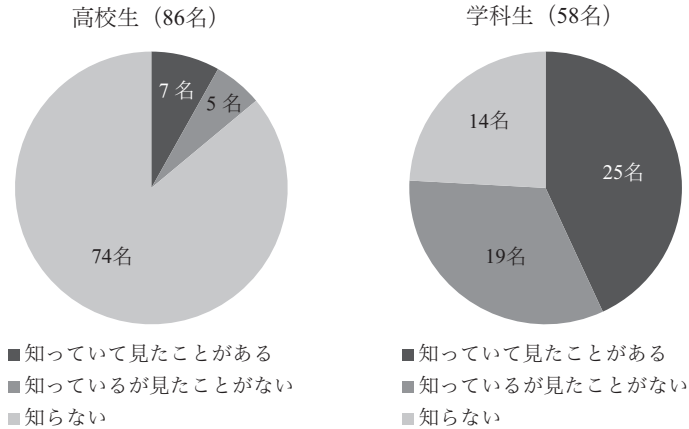


図8 オリジナルサイトの認知度についての回答結果
質問紙の回答結果より筆者作成

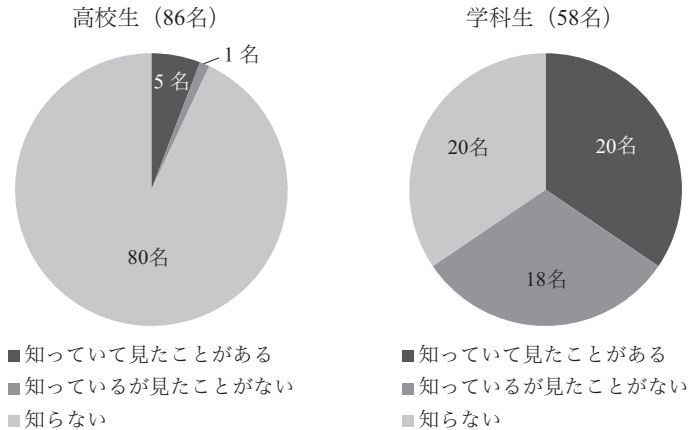


図9 国際関係学学科生ブログの認知度についての回答結果
質問紙の回答結果より筆者作成

内容が更新されていないことが分かった。

図9は国際関係学科生ブログの認知度についての回答結果をまとめたものである。高校生については、オリジナルサイトと同様に認知度が低い結果

となった。学科1年生については大半がブログについても認知していると分かった。サイト内の記事は内容によるカテゴリー化がされているが、未分類のものも多くみられた。なおブログについては、2012年の発足以降、現在もブログ委員と呼ばれる有志の学生たちによる執筆活動がほぼ毎週のペースで継続されている。本学科の学生主体の広報活動における代表的な広報手段であることから、現在の認知度は調査実施時に比べて高くなっていると予測される。

2-2-4. 実践活動報告

本研究では、実践活動及びそのフィードバック分析を目的として以下の活動を行った。

[学科紹介の映像作品制作]

2019年8月7日に開催されたオープンキャンパスでの上映を目的として、学科紹介の映像を制作した。既存の映像作品は学生へのインタビューが中心であった(YouTube「2014年 愛知県立大学国際関係学科オープンキャンパス紹介」)。しかし実際の授業風景のイメージや、他学科との比較が難しいと感じたため、それらの課題を補うことに留意して制作を行った。英語の授業、ゼミの動画に加え、学内ポスター発表会の写真などを使用した。英語学習は勿論、数ある選択肢の中から自分の興味に即した分野を探究できることなど、筆者らが感じた学科の特徴を紹介する映像作品を完成させた。残念ながら本映像作品は2019年を最後に活用されていない。その背景には、2020年度以降、新型コロナウイルス感染症の流行により、オープンキャンパスがオンライン開催となったことがある。今後は、オープンキャンパス以外の場でも本映像を使用する場を増やしたいと考える。

[文部科学省情報ひろばでの公開シンポジウム]

文部科学省情報ひろばで2019年11月1日に実施された公開シンポジウムに、本研究グループの学生が登壇した。第3部「課外活動を通じて学ぶ」のパートを本研究グループの学生が担当した。

[旅の写真展2019]

文部科学省情報ひろば及び本学の長久手キャンパスで開催された、2019年度の「旅の写真展」では、53の国及び地域で撮影された合計141点の作品を展示した(「亀井伸孝の研究室」ウェブサイト)。来場者からのフィードバックからは作品の質の統一性や展示スペースの工夫が必要であると分

かった。

2-2-5. 考察

本章では2019年時点での学科広報活動の総括と再評価を取りまとめた。本学科の学生によるマルチメディアを用いたこれまでの取り組みは、広報課の期待と受験生のニーズに応える、学生主体の広報活動のモデルとなると考えられる。一方で、成果物に対する認知度が低いことが分かった。また、活動の引き継ぎやブログ記事の分類に関する課題が明らかとなった。大学の知名度向上に資する学生主体の広報活動の更なる発展の可能性については、学外での活動機会を増やし、大学、学科について知ってもらうこと、SNSを活用して各学科のユニークな活動を発信していくことが有効であると考えられる。広報につながる写真展の活用方法については、さらに調査を続けることを本研究における今後の課題とする。

第3章 学科広報を担当した個々人の経験と学び (卒業生・在学生個人による報告)

3-1. 学生ブログの立ち上げ (松野佑子 [2011年度入学])

2011年度入学、学生ブログ初代委員長として活動した。ブログ開設当初、自身の学生生活は充実していると感じる一方で、学内外に本学科が知られていないように感じて、もやもやしていた。筆者の代で立ち上げたブログが10年後も継続しているとは、夢にも思っていなかった。

活動初期から投稿テーマに困ることはなく、授業やサークル、休みの過ごし方など、伝えたいことで溢れていた。しかし、「留学」について紹介したくても、1・2年生で運営するブログ委員は上級生との接点がない。そこで、先生から留学中の先輩を紹介いただくことになった。国境を越えてメールしていることに高揚しつつ、留学の記事に困っていることの相談をし、寄稿を依頼した。快く引き受けてくださった先輩方からは、まもなくして白地図に色を塗り広げるようにユニークな体験記が集まった。帰国後、ブログの更新を毎週楽しみにしてくれていたことを聞き、ブログに関わった人がファンとして定着することがあるのだなと感じた。2012年12月投稿の「料理用バナナを食べてみよう!」には、一般の方から数件のコメントが寄せられている。ブログが社会的な価値を提供したと手ごたえを

感じるとともに、読者が受験生にとどまらず一般へと幅が広がり、軌道に乗せることができた実感する出来事であった。

一般的なブログは、運営者の主観に基づいた自由な発言に面白さがあるが、インタビューやアンケートなど、他者の協力を得ながら運営される点が魅力である。新しいSNSが登場しても、ブログは文字数制限に悩んだり、インパクトある写真に人気を左右されたりしない。そして過去の記事にも容易にアクセスできる、間口が広いものである。振り返ると、偶然にもブログという媒体を用いたことは、後輩委員によって継続されたことによって効果を発した広報活動だったと感じている。各大学が学生獲得のためにプロモーションをするなかで、学生ブログは、費用をかけずに運営されている。投稿内容について事前チェックを受けたり、メンバー間で干渉しあったりすることはない。学生視点によるオリジナルの情報発信は、「生の声」を受験生に届けることができるので、本学科を身近に感じてもらえるのではないだろうか。

「学生主体の活動が多い」という点は、本学科の卒業生が口を揃えて言うことかもしれない。アイデアを声にしやすく、賛同してくれる仲間(ここには先生方も含まれる)がいることは、私が実感した学科の魅力である。どんな活動も、個々に裁量が任されているからこそ、遊び心のある活動ができると感じている。大学や先生方には、自由に活動させていただけたこと、ブログを学科公式にさせていただけた懐の深さに感謝している。

このブログも、今や本学科を代表する学生主体活動の一つとなった。歴代の委員と読者に感謝を申し上げるとともに、現役の委員の方々には、今後も自分たちの価値観を大切に活動してもらいたいと思う。

3-2. 学生主体の広報活動を成功させる要素(河島健木 [2012年度入学])

2012年度入学、学生ブログ2代目委員長として活動した。やってみなはれという学風は水が合い、学生ブログの立ち上げから継承まで推進した。新卒で総合商社へ入社後、フランス駐在を経て、食系ECへ転職した。本節では学生ブログが連続と受け継がれてきた要素を推察していく。

学生が立ち上げる組織において重要な要素は、大きく分けて二つあると考えている。それは① Will と Skill (意志と技能)、②変化対応である。以下で順に説明していく。

まず、① Will と Skill についてであり、よく人材採用で使われるフレー

ムワークでもある。これは Will と Skill を軸にマトリクスを組み、判断したい人材の属性を整理するものである。もちろん、Will と Skill の両方を兼ね備えた人材がいれば良いのだが、このフレームワークでよく議論になるのが、「Will があって Skill がいない人材」と「Skill があって Will」がない人材のどちらを採用すべきか？ というものである。

個人的な見解では、学生が立ち上げる組織において重要なものは、Skill よりも Will である。なぜなら Skill、知識や技術といったものは経験やトレーニングにより養うことができる一方で、Will、意志ややる気といったものは高めることの難易度が非常に高いからだ。一般的な企業であれば、給料や役職を与えることでやる気を引き出すことができるのだが、学生が立ち上げる組織において、大学側がそのような仕組みを用意することは難しいだろう。従い、Skill よりも Will、つまり学生の技能よりも意志ややる気を重視することで組織が活動的になり、継続していく大きな要因であるように考えられる。必要な知識や技術といったものは、意志さえあれば自分たちで学ぶことができるし、組織が継承されていくことで蓄積されていくのである。

この点について、学生ブログはどうだろうか。そもそもの起源が学生の自発的な主張によるものであったし、掲載媒体や内容、運営方法に至るまで、草案は学生によるものであり、学生が納得していることがベースとして存在する。好き放題やらせるわけでもなく、規則で縛りつけるわけでもない。学生と大学側がよく話し合い、建設的に組み立てていった結果、Will が尊重された組織が醸成されたと考えている。

次に、②変化対応についてである。

“It is not the strongest of the species that survives, nor the most intelligent that survives. It is the one that is most adaptable to change.”

(生き残る種とは、最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは、変化に最もよく適応したものである。)

これは言わずと知れたダーウィンの金言である。新型コロナウイルスの蔓延により10年分の変化が1年で訪れたと言われるが、日々の打ち合わせやオープンキャンパスなど対面でのコミュニケーションを活動の一部としていた学生ブログも、変化への対応を求められたことだろう。

日々の打ち合わせは Zoom へ移行し、ブログ委員と関係の深い役割の1つである新入生フォローは、新たに LINE や Instagram を活用したと聞く。加えてコロナ禍により情報が得づらくなる受験生たちに対して、従来通りブログで情報を発信し続けるだけでなく、SNS アカウントの広報活用などを並行することで変化に柔軟に対応してきたのである。つまり、自分たちのこれまでの活動が未曾有の危機によって脅かされた時、これまでのスタイルに固執せず、課題を受け入れ、変化に柔軟に対応していった結果、この組織は生き残れたと言えそうだ。

以上の通り、① Will と Skill、②変化対応を達成したからこそ絶えることなく活動を継続してこられたのではないだろうか。特に変化対応については、これからも継続していく必要性がありそうだ。例えば、SNS の爆発的普及や Z 世代の成人などの変化は大きい。そうすると新しい世代や変化を受け入れ、情報を発信していけるかどうかが学生主体の広報活動の分岐点になりそうだが、これらの機微を読み取る能力は本学科の十八番であるため、今後の更なる発展に期待したい。

3-3. 広報活動の原体験を通じた職業選択（橋本果織 [2015年度入学]）

2015年度入学、第4期ブログ委員のメンバーとして活動した。1年間の休学中に、ベトナム・ダナンにてインターンシップを経験し、現地の様子等について学外でも発信活動を行った。本節では、主にブログ委員の経験から得られた学びや、広報活動の原体験を通じた職業選択の一例について報告する。

第4期ブログ委員は総勢14名が参加し、歴代のブログ委員の中でも最多の人数であった。当時のブログ委員長やコアメンバーを中心として、大学生活の様子や先生方へのインタビュー、留学・海外旅行の体験記などに関する発信を行った。また、ブログ委員が主体となり、学科の交流を深める活動を積極的に実施していた点が大きな特徴である。入学直後の自主的な学科内バーベキューイベントの開催や、学科合宿での統一パーカーの製作、大学祭での出店などが主な事例である。

先述の経験から得られた学びについて、当時のブログ委員のメンバー数人に対し、チャットツールを用いて聞き取り調査を行った。その結果、主に挙げられた四つの学びを紹介する。

①推進力と当事者意識：活動を通して、ブログ委員それぞれが、当事者意

識を持って広報の在り方を検討した。その中で各々が自分の役割を見つけ、周囲を巻き込んで物事を推進していく力が身についた。

②文章力：ブログ読者へ、いかに分かりやすく伝えるかを意識してため、レポートや卒業論文の作成時にも、ブログの執筆経験が活かされた。

③人前に立つ経験、伝える力：学科の皆に何かを伝える時、どのような伝え方をすれば理解してもらえるかを考えるようになった。活動を先導することで、人前に立つ場数も踏むことができた。

④縦のつながり：学科内での横のつながりだけではなく、学年を超えた縦のつながりも深まった。

在学時の広報活動の経験は、上記で紹介したように、社会へ出た後も生かされる学びがあったほか、職業選択に対しても影響を与えている。私は現在、愛知県内の企業にて、広報や IR の業務を担当しており、まさに学生時代の発信活動や経験が、今の職業に繋がっていると言える。

学生ブログの特徴の一つとして、ブログ委員の活動に加わるきっかけが、元はブログ読者であったことが挙げられる。私自身も大学受験期や入学前はブログの一読者であった。学生が主体となって大学生活の様子を発信するブログは珍しく、活動内容に魅力を感じたことも、学科を志望する動機の一つとなった。情報の受け手であった読者から、実際にブログ委員になったことで、今度は自分自身がブログでの情報発信を通じて、読者である受験生の「きっかけ」作りができる点に大きな魅力を感じた。

ブログ委員の経験や海外インターンの業務等における発信活動から、就職活動の主な軸を「情報を発信し、世の中や人々に影響を与えること」とし、卒業後は通信社の記者となった。現在は転職を経て、記者とはまた異なる立場から、企業広報として情報発信を行っている。

結びに、学生が主体となって発信活動を行う学生ブログの強みは、「大学の魅力をリアルに、ダイレクトに伝える」ことができる点だろう。広告費用をかけて行う PR 活動ではなく、学生が実際に体験した生の声を、自主的な発信活動を通して読者に届けることで、より信頼度の高い情報発信を行うことができると感じる。

学生が主体的にのびのびと学びを深め、成長していく姿が部外にも届くことは、結果として大学の良いプロモーションにも繋がるのではないだろうか。学生ブログも発足から10年を迎え、一ブログ委員経験者として、今後も次世代につながるような魅力ある発信活動を続けてほしいと思う。

3-4. 学生主体の広報活動が活動者にもたらす影響：患者搬送調整を例に (清水優花 [2016年度入学])

本節では、在学中の学生主体の広報活動が、活動者の卒業後に及ぼす影響に関して私見を述べる。専攻と異なる分野に就職した筆者にとって、広報活動で体得した普遍的なスキルは自身の存在意義を見出す大きな助けとなった。その経験を、現在の業務内容を基に紹介する。

2016年4月に入学し、同年5月から2年間、国際関係学科公式ブログ委員を務めた。「旅の写真展」やオープンキャンパスでも活動し、2017年には在外研究中であった亀井伸孝先生の代理で恒例行事「国関バナナ教室」を主催した。休学、留学を経て復学した2019年には、下級生に向け「留学相談会」を開催した。2021年3月の卒業後は、愛知県の産業航空会社に勤務している。

現在の勤務先では、主に二つの業務を担当している。一つ目は、小型飛行機やヘリコプターの運航監視である。安全運航のため、地上で操縦士と経路上の天候を確認したり、機上からの無線通報を受け、適宜助言を行ったりしている。

二つ目は、臓器搬送や患者搬送といった、航空医療搬送の調整である。患者搬送とは、より高度な治療を受けるため等、様々な事情で転院を望む患者を運ぶことを指す。搬送時間の短縮や搭乗中の医療体制の確保、搬送時の安定性等の観点から、チャーター機での搬送を実施している。筆者は、搬送を滞りなく実施するための調整担当である。

入社当時は、航空、気象、医療、無線と、在学中の専攻と全く異分野の知識習得に苦心した。しかし、入社2年目より航空医療搬送を担当し、特に患者搬送の調整（以下搬送調整とする）で、広報活動の経験が生きていると実感した。

搬送調整では、各病院の医師やソーシャルワーカー、病院と空港間の搬送を担う消防本部等の機関、各空港の運航情報官、社内の操縦士、整備士、営業等、多様な立場の人々とのコミュニケーションが必須となる。各々立場や専門分野、決定権の掌握度等が異なるため、相手に伝わりやすい言い回しや媒体で情報を共有し、必要な人員、施設、手段を不足なく手配していくことが重要である。また、機体トラブルや患者の容態変化等、非常時の腹案も求められる。

以上から、搬送調整に必要なスキルは以下の三つと考える。

- ①必要なものを確実に準備するスキル
- ②相手の立場等を想像し、分かりやすく情報を伝えるスキル
- ③イレギュラーに柔軟に対応するスキル

以上は正に、在学中の広報活動で身に付けたスキルである。国関バナナ教室の開催を例示すると、①適当な会場・スケジュールの調整、参加人数に応じた材料等の準備、持ち物の周知、②プランテンバナナ（アフリカ原産の調理用バナナ）に触れたことがない参加者にも伝わる説明、③人数変更時の再編成や材料不足時の調達人員確保といった、当日のハプニングへの対応、等が想起される。

今回、航空医療搬送という一見特殊な分野の業務を紹介したが、求められるスキルは非常に普遍的なものである。学生主体の広報活動は、活動者が上述のスキルを体得し、卒業後の進路で活躍するための一助となるのではないだろうか。

3-5. 国際関係学科ブログ委員での活動を通して（坪井佑介 [2018年度入学]）

2018年度入学、第8期ブログ委員のメンバーとして活動した。国際関係学科「旅の写真展」の設営、出展に1年次から関わるなど、本学科の対外活動に積極的に取り組んだ。2022年9月に卒業し、2023年3月より韓国の大学院へ進学予定である。

ブログ委員での活動記録は、以下の通りである。

[記事の執筆] 在学中に寄稿を含め11本の記事を執筆した。「はばたけ県大生」や「学生自主企画」など本学の学生が利用できる奨学金制度を、自身の経験を踏まえて紹介する記事や、「プロジェクト演習」という本学科独自の授業に関する紹介記事、センター試験後のおすすめの過ごし方をまとめた受験生向けの記事、海外の映画や各国の映画を紹介する記事など様々なテーマを取り扱った。

[ブログの運営に関する会議] 翌月や翌々月の記事のテーマをどうするか、誰が担当するかを話し合うための会議を定期的に行った。これまでの記事を参考にして案を作ったり、全く新しいテーマを紹介する記事を計画したりするなど、意見を出し合いながらより人々に関心を持ってもらえるようなブログの運営を目指した。

[ブログ委員同士の交流会] ブログ委員で活動する学生同士の食事を交えた交流会を不定期で開催した。私が主に活動を行っていた1年次、2年

次はコロナ禍以前であったため、こうした交流の形態を取ることも可能であった。

ブログ委員での活動を通して学び得たことは、以下の通りである。

〔学科同士の縦のつながりの重要性〕 ブログ委員での活動や交流を通して、普段の授業では交流する機会の少ない学科の上級生、下級生とも親睦を深めることができた。そして、このつながりを基に学科の交流イベントなどを企画することができた。こうした経験から、複数学年が関わる形で学科の活動を行うことの重要性を認識することができた。

〔対外発信の重要性〕 ブログの記事では、本学科だからこそ得られる学びや、学科の特徴的な授業やイベントを紹介した。オープンキャンパスで本学科の説明を聞きにきた高校生の中には、ブログを読んだことが学科に興味を持つようになったきっかけだと話す人もおり、ブログが高校生や受験生の進路選択にも貢献していることが明らかとなった。

〔広報の方法〕 ブログを運営するという経験を通し、どうすればより多くの人に本学科のことを伝えられるか、どのような内容の記事に関心をもってもらえるかを検討することになった。これが有効的な広報の方法に関する学びへと繋がった。

〔豊かな文章力〕 ブログ記事を書くためには、レポートや論文を書く際とは異なる文章力が求められる。レポートや論文は論理的で明快な文章が良いとされる。一方でブログでは、多くの人が関心を持てるような、そして楽しんで読んでもらえるような文章を書く必要がある。何度か記事を書きながら手探りではあったが、魅力的な文章を書くための方法を体得することができた。

今後に向けての提言をいくつか記す。

〔SNSの更なる活用〕 本学科の Twitter アカウントや Instagram アカウントはあるものの、情報はそれほど更新されていない。とりわけ学生などの若い世代が利用する SNS で積極的な発信を行うなど、広報をさらに拡大、発展させることが期待される。

〔自身の研究の発信〕 2023年3月より韓国の大学院に進学し、引き続き研究を続けていく予定である。自身の研究をより多くの人に知ってもらい、理解を深めてもらうためには、それらをどのような手段を用いていかに発信するかが重要となってくる。本学科のブログ運営の経験を活かし、研究で行ったフィールドワークの結果や体験を自身が立ち上げたブログを通し

て発信していくことを計画している。

3-6. 感染症流行前後の架け橋になれたか（飯間有紀子 [2019年度入学]）

2019年度入学、ブログ委員9代目委員長として活動した。現在4年生で、2023年4月から新社会人となることにワクワクしている。それは、在学中に本学科生として様々な経験をし、それを糧に、納得感のある就職活動ができたからかもしれない。筆者の学年は、1年次は例年通りの学生生活を過ごし、2年次から新型コロナウイルス流行の影響を受けた。本節では、ブログ委員を引っ張る2年次、つまり2020年以降に行った新たな取り組みを、時系列で五つ紹介する。

第一に、「新入生サポート委員」が学科内で立ち上がった。感染症流行1年目である2020年度の新入生に、入学前後の不安などを解消する場を作ることで、彼／彼女らがスムーズに学生生活に慣れられたら、という思いで始まった。内容は、Zoomでの座談会、LINEのオープンチャットでの質問対応、Instagramアカウントの開設およびインスタライブでの学科紹介等が挙げられる。SNSならではの気軽さや匿名性が活きたのか、新入生から非常に多くの質問が寄せられ、役に立つことができたと振り返る。

第二に、月1回のブログ会議をZoomで実施した。2020年度は、新メンバー勧誘の時点からZoomで行われた。秋以降は徐々に感染症の流行が落ち着いてきたこともあり、注意を払いながら対面でも行うようにもなった。

第三に、2020年7月26日にZoomにて、ブログ委員OBOG座談会を開催した。オンライン上ではあったが、ブログ立ち上げ期の先輩方とつながれたことは非常に嬉しく、また、何年経っても本学科らしさというのは変わらないものだと実感した。

第四に、3年次の11月には、学科では初めての試みとして「学生によるゼミ紹介イベント」を主催した。例年、2年次の夏になると、先生方によるゼミ説明会が開催されていた。だがその機会だけでなく、「もっとゼミの雰囲気やリアルな話が聞きたい」という後輩の意見を受け、他の学科生と共に企画した。Zoomでの開催だったが、当日は2、3年生が合計60名ほど参加してくれた。翌年は後輩らが開催してくれたと聞き、発起人としては嬉しく思う。

第五に、4年次の10月には、2019年度入学生全員が3年ぶりに対面で集まることとなった学科の卒論中間発表会に合わせて、プチお菓子パー

ティーを主催した。バナナ基金を活用してお菓子を購入し、中間発表会当日のお昼時間に、学生らは教室でお菓子を手に、自由に話した。卒論中間発表会という場でありながら、良い意味で和やかな雰囲気になり、来年度以降も引き継がれることを期待する。

このようにコロナ禍ではあったが、その時の状況に合わせ、仲間と共に様々な新たな取り組みができたことを嬉しく思う。本学科の良さは、大きすぎず小さすぎない規模感だからこそ、自分が主体的にやりがいを持って動くことができ、かつ、それを応援してもらえる環境であることだと感じている。卒業後も、在校生や卒業生、先生方との交流を通して、学科の更なる発展に貢献できればと思う。

3-7. コロナ禍、時代背景に合わせた広報活動（赤塚まひろ【2020年度入学】）

2020年度入学、ブログ委員10代目委員長として活動した。2023年3月よりマレーシアに留学予定のため、2022年度現在は休学中である。

筆者は、新型コロナウイルス感染症が流行し始めた年の4月に入学した。楽しみにしていた入学式やキャンパスライフは閉ざされ、ステイホームの中で始まった大学生活だった。一人で何も分からない中、先生方や先輩方の助けが大きなきっかけとなり、ブログ委員に入った。自身も高校時代はブログの一読者であった。コロナ禍において対面で情報が得られない受験生の力、そしてモチベーションになりたいとの思いから、1年次は受験関係や、コロナ禍の大学生活を中心にブログ記事を執筆したところ、夏に閲覧者が急増した。具体的には、2020年6月11日には13万人、そして、2020年8月31日には14万人の総訪問者数に達した。これは、たった2ヶ月半で1万人も閲覧者が増加した計算になる。先輩や同学年メンバーら皆と力を合わせ、精力的に執筆した成果であり、数字を見た時は大きな達成感を感じた。また、初めは3名だった同学年メンバーも、後期までには新たに4名が加入してくれた。

また、本学科の特色としてイベントの多さが挙げられるが、2020年度はそれもコロナ禍で例年通りには開催ができなかった。前期は全てがオンラインであったため、学年での交流イベントもオンラインで開催した。後期は対面授業が一部再開したため、初めて直接顔を合わせての交流会を兼ねたハロウィンパーティーを行った。前年度までは「黒い服を着用」というドレスコードのみだったところを、レク形式で行ったのは私たちの代が

新たに築いたものになった。1年生のほとんどが参加してくれ、好評だった。

2年生になると筆者が委員長を引き継ぎ、まず新入生交流会を開催した。クイズ大会やグループトーク等を行い、終了時には参加賞としてお菓子を配り、とても楽しんでもらった。後日、何度かブログ委員への勧誘を行ったところ、新メンバーが14名も加わった。これほど多くの後輩がブログに関わりたと思ってくれたことに感動と改めて達成感を感じた。

広報活動に関しては、ブログに加え、先輩方が2020年度入学生へのサポート目的で作ってくださった学科のInstagramアカウントを、筆者らブログ委員が引き継ぎ、SNSを活用した広報を開始した。ブログが更新された際や、オープンキャンパスの宣伝、年度始めにはストーリー機能を使い、本学科に関する質問募集と回答を行った。さらに、新入生や高校生のいる場でアカウントを紹介すると、直接ダイレクトメッセージで学科に関する質問を送ってくださる方がたくさんいた。受験生本人だけでなく、その保護者までもが直接学生の声を聞きたいと連絡をくれたのだ。これにより、学内と、受験生を含む学外とのつながりをより広く持つ手段を生み出せたと考える。時代背景に合わせた今後の広報活動として、Instagramも着実に受け継いでもらえたら嬉しい。

学生ブログは、筆者だけでなく、多くの人の力になり、学科の魅力を伝える素晴らしいものだと考える。コロナ禍での入学で大変なことも多くあったが、そのお陰で成し遂げた広報活動だったといえる。この伝統を作り、継承してくださった先輩方に感謝を申し上げるとともに、今後のブログをはじめとした本学科の広報活動の発展を願う。

3-8. 未来に向けて、伝統ある活動を受け継いでいくには (木下涼美 [2021年度入学])

2021年度入学、ブログ委員11代目委員長として活動中である。現行メンバーとして筆者の他に、2年生12名、1年生6名の計18名で活動している。

筆者の代では、ブログ記事の執筆に加え、例年以上にブログメンバーが中心となって積極的に、学科交流イベントの開催を目指して活動している。その背景には、筆者の代が高校3年次に始まった、新型コロナウイルス感染症の流行がある。筆者ら1、2年生は、「高校生活と大学生活の青春を

コロナに奪われてしまった」という思いがあった。だからこそ、「コロナで奪われた青春を取り戻そう！」をモットーに、様々な取り組みを行ってきた。

具体的には、まず1年次の7月に「七夕DAY」という浴衣を着るイベントを再開した。浴衣を着て、ゲームをし、記念撮影をする学科の恒例行事なのだが、筆者の一つ上の学年は感染症の影響で実施できなかったため、昨年度から復活させることができた。これが学年全体で行った最初のイベントであり、貴重な機会となって非常に良かった。

2年生になった2022年度の春には、新入生を対象とした新入生歓迎会を企画した。これも例年だと一泊二日で行われているそうなのだが、感染症の影響で難しく、今年度は1日限定で開催した。大学生活において、入学当初に学生同士が仲良くなる機会はやはり大切だと感じるため、今年度の1年生にはそのような場を設けることができ良かった。さらに今年の夏には、ブログメンバーを中心にバーベキュー大会を開催した。学外でのバーベキューの実施は非常に久しかったようで、参加した学生の反響は想像以上に良く、思い出深いイベントとなった。この反響を受け、冬には新たにボウリング大会の開催を予定している。

学科の情報発信に関しては、今後はより時代のニーズに合わせられるよう、ブログ記事だけでなく、InstagramやTwitter等のSNSの活用をこれまで以上に促進させたい。そして、本学科に関心のある方々はもちろん、そうでない方や、愛知県外に住んでいる方など、より幅広い方に情報を届けたいと考えている。

最後に、このような素敵な伝統を築き上げて下さった本学科の先輩方、そして亀井先生をはじめとする先生方に御礼申し上げたい。受け継がれてきた伝統を大切に、また、各代の味を付け加えながら、引き続き学科を盛り上げていこうと思う。

おわりに (亀井伸孝)

学科の特色作りと対外的発信を兼ねて、軽い着想で始まった本学科の学生広報活動が、10年の歳月を重ねることにより、学科の歴史を刻む膨大な記録が形成されただけでなく、学内外に人脈を育み、学生たちの能力を開花させ、ひいては在學生や卒業生たちの生き方にも大きな影響を及ぼし

てきたことが、これらの報告から見て取れるであろう。

今後ともいち教員として、学生たちの自発性を尊重し、学生自身の表現の自由を守りながら、広報活動の支援と活性化に努めていきたい。

【謝辞】 今回のシンポジウムは、愛知県立大学地域連携センターとの共催で開催されました。これまで学生広報で活躍してくれた93人のスタッフのみなさん、広報に協力してくださった本学教職員各位、取材に応じてくださった関係各位、ブログやその他のメディアで、本学科のコンテンツを閲覧してくださった読者のみなさん、シンポジウムの準備に尽力した卒業生、在学生、職員の方のみなさん、ご来場のみなさんにお礼申し上げます。

注

- 1) 本学広報課への聞き取り調査の結果も含めた自主企画研究全体の結果および実際に使用した質問紙については、愛知県立大学図書館に所蔵されている『令和元年度 学生自主企画研究 事業報告書』(pp. 119-140)を参照。

文献

- 「愛知県立大学外国語学部国際関係学科 学生オリジナルサイト」(2020年1月16日閲覧) <http://apukk.web.fc2.com/>
- 石井俊・赤塚まひろ, 2022. 「国関ブログ発足10周年企画！」『愛知県立大学外国語学部国際関係学科公式学生ブログ』(2022年2月6日掲載) <http://kendaikokusai2012.blog.fc2.com/blog-entry-551.html>
- 岡本茂・松山泰男・大島邦夫編, 1997. 『精説コンピュータ理工学辞典』東京：共立出版。
- 河島健太, 2012. 「外務省セミナー！」『愛知県立大学外国語学部国際関係学科公式学生ブログ』(2012年7月18日掲載) <http://kendaikokusai2012.blog.fc2.com/blog-entry-3.html>
- 亀井伸孝, 2016. 「NHK 総合テレビ「あさイチ」で国際関係学科の学生の活動が紹介されました」『愛知県立大学外国語学部年報：2015年度』p. 98.
- 亀井伸孝の研究室「愛知県立大学国際関係学科フィールドワーク・フェスタ：旅の写真展／旅の報告会・茶話会：2011年以降の全記録」(2020年1月14日閲覧) http://kamei.aacore.jp/fieldwork_festa-j.html#2020
- 総務省, 2022a. 「通信利用動向調査」各年版 (2023年2月2日閲覧) <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05a.html>

総務省. 2022b. 「令和3年度 情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」(2023年2月2日閲覧) https://www.soumu.go.jp/main_content/000831290.pdf

総務省. 2022c. 「令和3年版 通信利用動向調査」(2023年2月2日閲覧) <https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/statistics/statistics05a.html>

「2014年 愛知県立大学国際関係学科オープンキャンパス紹介」(2020年1月7日閲覧) <https://www.youtube.com/watch?v=H4LJDUHo1Mo>

リクルートカレッジマネジメント. 2021. 『コロナ入試改革をどう乗り越えたのか』(29): 1-62.